

述べて作らず

土田龍太郎

子曰述而不作信而好古竊比於我老彭

子曰く、述べて作らず、信じて古へを好む。竊に我が老彭に比ふ。

といへる章句もて始まる論語第七篇、述而と呼びならはせるは、この章句の中の二文字に由れること云はでもしるかるべし。

ここに名の見ゆる老彭、孔子に先立ちて世にありし賢者なるこそをさき疑ひなければ、その生れといさをしを定かに知らむよすがなきぞいともあいなき。近き世に程樹徳のものせる論語集釋、述而篇のこの條下には諸書に見ゆる老彭のことあれこれ引き列ねてこちたきほどなれど、くさぐさの論あけつらひいづれあたりや定めむによしなければ、釋義の林の中にただ迷ひ入りぬる心地のみしていかにともせむすべ知らにわびるたるほかなきなり。

さはれ陸徳明の經典釋文に引ける老老聃彭祖といへる鄭玄の註記、また刑炳の論語正義に引ける老是老聃彭是彭祖といへる王弼の註記、なほざりには見過すまじくていささか心とめまほしくぞおぼゆる。

かの太史公の敘ぶる孔老會見のことそらごとのみとも思はれず、禮記曾子問には吾聞老聃てふ孔子の語さへ二所には見ゆなれば、孔子の老子を尚びて倣はむとせしことたえてなかりきとはあながちに定めがたし。好古不作爲と無爲自然と似よれるふしなきにあらねば、もし鄭玄王弼の註記によりて孔子の老子に學べりしことまことにありたりとせばおもしろきことよなからまし。さはれいかなる文のはしにてもあれ、なほ定かなる證あかし見出でざるうちは必ずさありきことわるべくもあらず、述而篇初章をしひて道家者流に寄せて説かむことしばし思ひ放たであるべからねばあきたらぬ心地のみしていとも本意なし。

朱熹の論語集註に老彭商大夫と記せるは、何晏の論語集解に引ける包咸註に老彭殷賢大夫好述古事我若老彭祖述之耳と云へるをさながら採れるなるべし。これにまされる解きやうもし新に出でくまじきにもあらねど、今かりにこの包註朱註に従はむもさまで障りあるまじくぞおぼゆる。

公治長篇にて孔子

十室之邑必忠臣如丘者焉不如丘之好學也

と云ひておのが好學を述べたれど、これみづからの好學を誇れるにてはあらず、はたわが好學に倣へならと勸るにてもあらず。われ學を好まずては一日も世にながらふまじてふ心のありさまをふと述べしのみなり。述而篇の好古と公治長篇の好學とひとしく夫子の問はず語りの言の葉と云ふをうべし。

道者聖人之制作也と説く儒者なきにあらねど、これさらに従ひがたし。まことの道とは人の智慧もて作りしものとはゆめ思ふべからず。わたくしのさかしらもて作り設けし道とはいつはりの道にほかなきなり。われはただ古き道を學びてわが身に行ひ人に傳ふるのみなり。わが學ぶ道をわれはさながらまことなりと思ひとりてつゆ疑ふことなし。われはおのがせまき智慮もて道を論ふにはあらず。ただ古へを好むばかりなり。良し悪しはともかくもあれ、はたこと人はいかにてもあれ、われはしかせざるをえざるぞかし。述而不作信而好古てふ八字、もしこころみにかく解かば孔子の意にさしもたがはざらまし。

凡そ三千二百二十篇ありし書より孔子の百二篇を選びて尚書となし、はじめは三千篇に餘りし詩を三百篇に刪りしこと、はた魯の史記に據りて春秋を編綴せしこと世に知られぬれど、かかる刪修のわざ、聖人先王の道を舊きままに傳ふるのみにて、おのがわたくしの考へもて變へ改むることたえてなかりしとせば、これをもまた述べて作らずと云はむもたがはざるべし。この趣き朱熹は集註にて左のごとくに釋きたり。

孔子刪詩書定禮樂贊周易修春秋皆傳先王之舊而未曾有所作也

世の經學者流さまさまにて、いはゆる今文家の内には孔子素王と仰ぎ孔子改制を唱ふるものさへあるなれども、その説きさま虚言めき誣言がましきふし少からざるめれば、ここに顧でも苦しかるまじ。しばらく右に引ける朱註に従はば大方は危からざるべし。

わが本居宣長翁、漢心をひたぶるに厭ひ斥けてやまざりしこと、知らぬ人としてはあるまじ。おのが浅きさとりもてかにかくに思ひはからひまことをつつみかくしていつはるが漢心にほかならず。この漢心、漢國人にかぎれるにてもあらず。唐土人ならぬ西戎のさかしらもてものごとのまことのさまを歪め矯むるをも漢心と呼ぶを得べし。

この漢心、漢國人にことにいちじるけれど唐土人のみなながら漢心に染まりぬるにてもあらず。されば鈴屋大人あながちに孔子を貶ることなきは、この大人より見るときは、孔子の漢心のかたになづめることさまでいちじるからず、古き道をひたぶるに尚びおのが巧みもてさかしらに作り加ふることのまれなりしがゆゑにてもあるべし。鈴屋翁、孔子の人となりを好むあまり

聖人と人は云へども聖人の

たぐひならめや孔子は良き人

といへる孔子を譽むる一首さへものしたり。かりに今、鈴屋大人の考へに沿ひて、述而篇初句をけみせば、この章句、漢國の聖なる孔子のまことは漢心にさまで染まざりけるさまを述ぶるものときへ見るを得べければ、げに思ひのほかの心地しておもしろきこと云はむかたなきなり。

(令和五年六月二十六日受附)